

### キーワード：

初めて描く日本画  
実技カリキュラム  
骨描き  
デッサン  
右脳

概要：造形学部実技カリキュラム中日本画の授業を行う上で、課題となっている主な事柄を取り上げる。そこから浮かび上がる授業の現状と根本的な原因を授業改善のための方法を日本画の「骨描き」制作時に絞り考察していく。

### はじめに

今年度も造形学部アート表現コース2年生の選択授業である「絵画制作B（初めて描く日本画・受講者16名）」での指導を行なうにあたり新たな発見や更に改善すべき点が生じた。その中でも今年度は日本画の下描きの作業である「骨描き」の工程に絞り、初めて日本画を描く学生たちが感じる「骨描き」に対する面白さと陥りやすい問題の例をあげ授業への振り返りをおこないたい。同時に本年度行った社会人向けの日本画講座での作画例や、受講者からの感想から得られた「骨描き」の指導に有効な工夫にも触れておく。本稿では、上記2点を元に見えてきた日本画を初めて描く学生のための授業の在り方を考察していく。

### 1. 「骨描き」と墨線

日本画を描く工程の中で、実物大の下図を画面にトレースをした後に面相筆による細い墨線でトレース部分を明確に描き起こす事を「骨描き」という。一度入れてしまったら修正の利かない墨による画面への下描きは、不透明な岩絵の具や水干絵の具をある限度内での塗り重ねにより描かれる日本画にとっては、重要な骨組みのようなものといえる。

日本絵画の歴史における「骨描き」は、墨線そのもので制作される白描画から墨線による描画に彩色を施した絵巻作品、骨描きが完全に埋もれて完成される大和絵や障壁画・肉筆浮世絵まで様々に見え隠れしながら存在している。

その後戦後の日本画の主流となった丈夫な麻紙にやや厚めの絵の具の塗り重ねる表現方法では最終的に、描画のために置かれた絵の具の層にほぼ埋もれがちな骨描きの線だったが、田淵俊雄（1941年～）の作品にみられる骨描きの線そのものの美しさや力強さを岩絵の具の描写と共存させた作品の登場に加えて松井冬子（1974年～）の墨線を生かした絹本着彩作品による女性像が2005年に発表されると、忽ち絵絹に美人画を線描で描く事がブームのように日本画界に広まった事。この2点から「骨描き」にみられる墨線

による描画は単に下描きのためのモノから日本画の魅力的な表現方法として、美術を学ぶ学生の中に認識されているようだ。それはアート表現コースの学生たちが春と夏の長期休暇中にする参考作品ファイルの内容に、日本画による装飾的で線描が全面的に生かされた女性像作品が多く見受けられることから察せられる。



鳥獣人物戯画 12世紀-13世紀



田淵俊雄 「緑詩」1990年

## 2. なぜ「骨描き」をするのか

ではなぜ、日本画には「骨描き」といった、完成された下描きをくまなく墨線で描き起こす作業が必要なのだろうか。その理由は、日本画で用いられる絵の具の不透明性とメディウムとして用いられる膠水の粘度の低さからくる支持体を床に平置きする制作方法が主たる理由にあげられる。

通常油彩画やアクリル画等で静物モチーフの小品制作などを初心者が行う場合、エスキース帖の中で構図を決定した後は、モチーフの大まかな形が予定している構図の位置に大まかに当たりとして描かれればベースの絵の具を置く作業へと進む事ができる。またこの初期段階で最終的なモチーフの形や細部までを修正の利かない墨で「骨描き」のように決定して描いてしまう事は画面内の空間自体を壊す事にもつながりやすいため、むしろ禁止されている。

これは、油彩画やアクリル画のように粘度の高いメディウムを用いる場合は、イーゼルなどで支持体を垂直に近い角度のまま(図-1)画面表面に顔料とメディウムを定着乾燥させることが可能であるため、常にモチーフを観察しながら、描画ができるからだ。この時、支持体は制作者に対しパースによる歪みを生じない。

それに対し日本画の制作時は、顔料を含んだ膠水が流れ落ちずにゆっくりと和紙に染み込む時間が必要なためほとんどの工程を平置きの状態(図-2)で行う。写真(図-3)を見てわかるように制作者に対してパースが付く事で歪みを生じてしまうのだ。

そのため絵の具による作業中は、モチーフに対するフォルムの修正が困難になる事に加えて、絵の具の不透明さが描画の初期段階であっても下描きの当り線などを簡単に隠してしまう事態となる。形の修正には、絵の具が垂れないよう画面を乾かした後に床から立ち上げなくては歪みを確認できない。しかし修正するための筆を置くためには支持体を再び床に寝かさなくてはいけないのだ。

その繰り返しでは描画が進むはずもなく、憶測で絵の具による描画を続ける羽目に陥るのである。また、このように漫然と絵の具による修正を行う事で、必要以上の絵の具の塗り重ねが生じる事になり、膠の乾燥に伴って支持体の和紙が破れてしまう事も招くのだ。

そもそも膠水と顔料の塗り重ねは延々と重ねが利くものではない。一定の塗り重ねを超えると顔料の発色が悪化すると同時に画面和紙の柔軟性を奪い膠が乾く時に強く縮む事で和紙にダメージを与えるのだ。

以上の点から、日本画を描く際には、完成した実物大の下図(大下図)と細部をあらかじめスケッチしたものを用意し、大下図のトレース後「骨描き」を絵の具に埋もれにくい色でもある墨で行うのである。



●油彩画・アクリル画制作時：粘度の高い絵の具で描く場合は画面を垂直に立てて制作を行う事ができる。この時支持体は制作者に対して極端な歪みを生じない。(図-1)



●日本画制作時：粘性のない水性の絵具を支持体の和紙に常に獅染み込ませ定着を安定させるため画面はほぼ寝かして制作を行う。特に大作の場合は図のように画面に乗り板を渡し、画面上に制作者が乗るため画面全体を確認しながらの絵の具による描画ができない。(図-2)



●日本画制作時に制作者から見える支持体。大作になるほど遠近によるパースが付き正しい形を描く事が困難となる。(写真のパネルはF100号)(図-3)

## 3. 「骨描き」の楽しさと難しさ

以上の事柄を授業時に説明を行った上で、実際に見本用の和紙に「骨描き」の線を引く練習を受講者全員に行わせる。そうすると通常使う鉛筆との違いに皆

戸惑いながらも、消しゴムでは消せない事からくる程よい緊張感を持って全員が墨線を引く事に夢中になっていくようだ。鉛筆デッサンでは、一向に自信がないまま描いては消しの繰り返しの学生も、自分が今まで引いた事のない濃くてシャープな線に新鮮味を感じるのか良く描き続けている場合が多く見受けられる。ここまでは、毎年ほぼ全員問題なく熱心に取り組む工程だといえる。

しかし、「骨描き」に用いるための線描の準備が楽しくできて大下図の鉛筆によるデッサンが遅々として進まない学生がチラホラと現れる。直接画面に墨で描かず、下描きのデッサンがベースなので、ここで焦らずに粘って良い形を拾えると「骨描き」の線描きも益々精度が増し、岩絵の具を載せなくても美しい画面が登場する。そのためデッサン力を少しでも向上させた受講者は益々没頭する工程でもある。その反面、墨線の練習でできた線の美しさを楽しむ事とデッサンへの苦手意識とのギャップで手が止まってしまう学生の指導にも追われるのである。

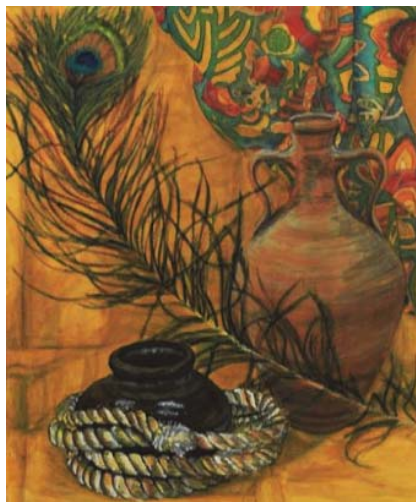
消せない墨だからこそいつもの何倍も集中して描くのか、良い形は拾えそうにないから墨で描く事は大惨事を引き起こすのだという思いで動けなくなるのかに二分化されるようだ。

今年は作品サイズを昨年よりもやや小さめにしたため授業では、形が取れない学生にはどんなに遅れても焦らずに下図のデッサンに取り組ませた。その結果練習して描いた美しい墨線での「骨描き」をいつもより良い形で集中させることができたようだ。作品サイズを下げた事で制作意欲を削いでしまう恐れもあったのだが、時間にやや余裕を感じさせ「骨描き」の段階で完成度の高い状態を多数確認できた。小品ながら初めて描いた1点目では形が伴わず苦勞をした学生も二点目で「骨書き」が驚くほど安定した良い作品を完成させている者もみられた(図-5 図-7)。

#### 4. 「骨描き」だけで

さて今年は、この授業後の9月中旬に社会人向けの日本画ワークショップで「骨描き」だけで身近な野菜を描く授業を2日間にわたり10時間行った<sup>\*1</sup>。受講者は、静岡県立美術館友の会会員15名。美術大学を卒業された方や、なおかつ美術館での鑑賞にも熱心なすでに絵を描く事が大好きな方が多い集まりとも言えた。

実は、4年前にも同じ友の会で日本画のワークショップを同じような人数の受講者に対して行っていた<sup>\*2</sup>のだが、日本画の岩絵の具の発色や質感の楽しさの前の骨描きの楽しさに受講者の興味が集中しすぎてしまい完成までの時間配分が歪になってしまった感があった。その反省から、今回は「骨描き」部分に特化



2年福原香奈  
上1作目 F6号  
(図-4)  
下2作目 F8号  
(図-5)



2年山口日和 上1作目 F6号(図-6) 下2作目 F8号(図-7)

して作品をF4号サイズのものを2枚描いてもらうことにした。デッサンを勉強済みの受講者がほとんどなため、1回5時間の授業中に飽きないモチーフ選び(トウモロコシ・トマト・里芋)を心がけた。実際に

<sup>\*1</sup> 2018年9月16日(日)・17日(月祝)10:00~16:00  
静岡県立美術館友の会 ワークショップ

「面相筆で身近な野菜を描こう」受講者15名  
<sup>\*2</sup> 2014年8月3日(土)・4日(日)10:00~16:00  
静岡県立美術館友の会ワークショップ  
「ミニ日本画で果物と器を描こう」受講者12名

授業を開始してみると、やはり今回も日本画経験者や美術について博識な方も多く二日間楽しんでいただけたか少々不安であった。しかし今回は骨描きのみで仕上げる事もあり、絵の具を扱う煩雑さがなく教室全体の集中力も上がったようだった。下描きの鉛筆デッサンまでは形がとれない事をぼやく声が少々聞こえたが、面相筆での線描練習に入ると教室内が静まり帰り受講者の没頭度が伝わるものとなった。

そしてここでの授業でも、鉛筆デッサンから「骨描き」に移る際に、没頭する受講者と集中がうまくいかない受講者とに二分された。しかし二年生との授業時と同じように焦らずに鉛筆の作業を続けてもらう事と、上手く形が描けていない事よりも線を1mm1秒で描く事に集中してもらう事を伝えた。その結果最終的には、自分が観察して見つけた美しい形に沿って「骨描き」を楽しんでもらう事が出来たようだ。

とかく高齢者の方が多く集まるワークショップや教室では、和やかな会話が途切れずに制作や進む事が多いのだが、今回は授業時間いっぱいまでほとんどの受講者が喋る間もなく制作に没頭されていたことが大変印象的であった。

## 5. 制作の没頭に導くもの

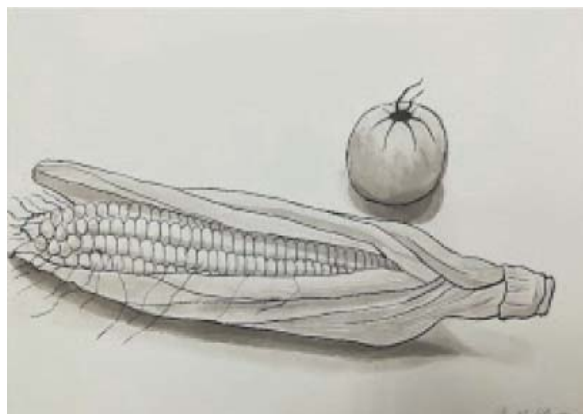
ワークショップでの制作後に受講者からの感想をお互いにフィードバックする時間を設けた。そこで出てきた印象深い感想の一つに、「今まで野菜など描いた事がなかった。最初はお手本もなく、困り果てた。美大受験も経験し石膏デッサンも沢山描いてきた私が、里芋やトウモロコシに対して途方に暮れたことに自分で驚いた。最初は少し腹立たしさもあったので渋々骨描きに入ったが、気が付いたら描いた事がない形の面白さに線を描く事に没頭していた。上手にかかねばという気持ちが追いやられた。」というものがあつた。

学生は元より、人生経験をつまれた社会人受講者にも共通する事。それは、やはり過剰な自己批判なのではないだろうか？加えて手っ取り早くお手本の様に描くためにモチーフの記号化を行う事。この2つが過剰になるに伴い描くために使う意識が枯渇してしまうように思われる。

今回は、日本画の消せない墨による「骨描き」という工程のみで制作をした事と、あまり身近に描かれたお手本作品の前例がない野菜をモチーフにした事で自分の作品への自己批判が控え目になったのかもしれない。

## まとめ

絵画制作の授業の中では、2年生に初めて日本画を描いてもらう部分について毎年一番悩む事が多い。日本画の制作後、どのメディアで制作するかほとんどの



受講者作品 トウモロコシとトマト（制作5時間）  
墨・画用紙・F4号

学生が未定な事もあり、どこまで授業内で日本画の技法材料を教え伝えるべきかが特に悩みの種である。

時間をかけて何点も制作をしない事には日本画という画材の特質は会得できないのだからと思いつつも、どこか短時間で日本画画材で描く事の面白さに出会って欲しいという欲が出てきてしまうのだ。

今年度は「骨描き」の部分に注目をして振り返りを行ったのだが、ワークショップの受講者からの感想からは、教える側の欲やせっかちな効率や効果を求める授業中の私自身の忙しさにも気づくひとコマもあった。学生や受講者への「焦らずに・自分の作品を批判せずに」という声かけを一番忙しく授業の指導をしている私が行っていたのだからだ。

昨年度、描くための脳や目の働きにも注目したが、日本画画材の制約から行っていた「骨描き」が黙々と墨線で形を何処だとも思わずに滑らかに描き込まれていく瞬間、批判に忙しい左脳を黙らせてくれていることに気づかされた。そこから受講者皆で制作に没頭している教室に関わる事の楽しさとその質や維持に授業改善の切り口を移し行いたいと考えている。

せっかちに上手に描ける方法を教える事に走りやすい授業ではなく、画材が持つ特質や制約からえられる時間の流れ方や没頭のしやすさなどにも今後の授業では目を向けていきたい。

■参考文献・参考文献

- ・マックス・デルナー「絵画技術体系」  
美術出版社 1980年
- ・重政啓治監修「日本画の用具用材」  
武蔵野美術大学出版局 2010年
- ・ベティ・エドワーズ「脳の右側で描け 第4版」  
河出書房新社 2013年
- ・齊藤亜矢「ヒトはなぜ絵を描くのか-芸術認知科学への招待-」岩波科学ライブラリー 2014年
- ・荒井経「日本画と材料 近代に作られた伝統」  
武蔵野美術大学出版局 2015年
- ・成富ミヨリ「絵はすぐに上手にならない」  
彩流社 2015年
- ・垣見敏雄「中学校における日本画指導の可能性」  
日本美術教育学会会誌 No.301 2017年
- ・川畑秀明「脳はなぜ美に魅せられるのか」  
「脳科学と芸術」第1部3章 工作舎 2008年
- ・荒木慎也「石膏デッサンの100年」  
石膏像から学ぶ美術教育史 2018年